

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：37503

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K01196

研究課題名（和文）朝鮮時代の国土地理認識における「水経」の基礎的研究

研究課題名（英文）Fundamental Study of "Sugyeong" in Geographical Recognition in the Joseon Dynasty

研究代表者

轟 博志（Todoroki, Hiroshi）

立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学部・教授

研究者番号：80435172

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、朝鮮王朝時代における地理学者たちの国土地理認識に関する、研究代表者の一連の研究の、集大成に位置付けられるものである。研究代表者の仮説は、朝鮮王朝、特に儒学者たちによる実学研究が最盛期を迎えた18世紀中盤の英祖代において、国土地理研究も完成期を迎えたことを前提としている。

申景濬に代表される、国政にも一定の影響がある地理学者たちが、国家間としての心象地理形成に寄与したところは非常に大きかった。

既存の研究では、国土地理の主たる構成要素のうち、山と道路、そして都市に大きな労力が割かれていた。一方で、河川に関しては、ほとんど言及がないままであった。そこで本研究では水路分析に注力した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

韓国においては、伝統的な国土地理認識は、植民地近代を経て風化し、戦後かなりたってから、1990年代に、歴史地理学者らによって再発見され、日の目を見ることになった。そこからかつての史料の掘り起こしと分析が行われ、系譜学的研究なども行われた。

さらには、そのうちの山岳認識に関しては、白頭大幹を中心として、一般にも広く周知され、商品のマーケティングにも使われ、白頭大幹の稜線縦走という、新しいメジャーな登山文化まで生み出した。道路も同様に、かつての路線が復元されてからは、その道を使ったウォークツアーが開催され、また各自治体の観光マーケティングが活発化した。今回の水路も、同様の効果を期待する。

研究成果の概要（英文）： This research is positioned as the culmination of a series of research conducted by the principal investigator on geographers' recognition of national geography in Korea during the Joseon Dynasty. The principal investigator's hypothesis is based on the premise that geological research reached a stage of completion during the Joseon Dynasty, especially during King Yeongjo's rule in the middle of the 18th century, when practical science research by Confucian scholars reached its peak.

Geographers who had a certain degree of influence in national politics, represented by Shin Kyungjun, made a great contribution to shaping the image of geography as a view of the nation.

In existing research, a large amount of effort was devoted to mountains, roads, and cities among the main components of national geography. Rivers, on the other hand, remained largely untouched. Therefore, this study focused on the analysis of waterways.

研究分野：歴史地理学

キーワード：歴史地理学 水経 実学 朝鮮王朝 申景濬 山水考 東国文献備考 白頭大幹

1. 研究開始当初の背景

朝鮮における伝統的な歴史地理学(以下、伝統歴史地理学)の学風は、18世紀にその基礎が固められた。20世紀以降の近代歴史地理学と並んで、現代の韓国においても、歴史地理学の両輪を形成し、また近代歴史地理学における、主要な研究対象ともなっている。伝統歴史地理学の主たる担い手は、当時の官界または在野の実学者であり、その成果物は、主に古地図や地誌、随筆等として残される。それらの内容や表現には、当時の著作者や実学者間における地理認識や思想が色濃く反映されており、また著作者の意見が割注などを通じて、しばしば直接書かれる。そのため、朝鮮王朝時代の国土地理認識を研究するために、近代歴史地理学においても、特に1990年代以降、主要な研究素材となってきた。

国土地理認識の骨格を為すものは、山(峠や分水界を含む)、川(海を含む)などの自然景観と、道路や集落(都市を含む)などの人文景観に大別され、また自然と人文の双方を繋げる概念として、風水地理説が多用された。これらの中で、最も研究が進展した部分は「山経(伝統的な分水界の体系概念)」に関してである。全国的な体系の復原と、形態論・認識論双方の研究が進んだ「山経」に対して、「水経(河川水系概念)」に関する研究は遅々として進んでいないのが現状だ。主として「水経」を扱った地誌や古地図単体やその著者に対する言及に留まっており、論考の数も多くない。

その理由は大きく二点があると考えている。一点目は、そもそも18世紀から19世紀において、実学者たちは国土地理における山水の表裏一体性を認識しつつも、実際の研究成果としては『山経表』を始めとした「山経」に集中し、相対的に「水経」に関する研究は等閑視されてきたためである。特に申景濬の『山水考』を底本に『山経表』は作られたが、『水経表』は作られなかったことが大きい。二点目は、一点目の結果として水経を扱った史料が少ないため、近代歴史地理学の課題として研究する基礎資料が不足していたためであると考えられる。

つまり、伝統歴史地理学においても、近代歴史地理学においても、朝鮮時代の「水経」認識研究は未完成だということだ。

2. 研究の目的

本研究では、「水経」の体系を具体的に明らかにし、実際に「山経」と表裏一体の関係にあるのか、また自然・人文の両性を具備していたのかを、伝統歴史地理学及び近代歴史地理学の手法を用いて立証することを第一の目的とする。またその目的を達成するために、実学者たちが未完成で終わった「水経」の完成を第二の目的とし、第一の目的のための基礎資料とする。

つまりこの研究は、テーマが同じ現在の歴史地理学者の未完の業績と、朝鮮時代の歴史地理学者(実学者)の未完の業績を、同時にかつ相互補完的に完成させていくという、通常あまり取られない手法をとる。現代持ちうる知見を過去の歴史地理研究の完成に活用でき、また近代歴史地理の研究のためには、活用可能な二次史料が増加するという、双方に肯定的なメリットである。歴史地理学の伝統が300年を超す韓国においては、今後道路研究や集落研究など、他の認識論研究に応用できる可能性がある。この点は、本研究の最も独創的な部分であると考えられる。

3. 研究の方法

上記の研究目的に沿って、本研究においては「書誌的検討」「図上の検討」「現地調査」の三つの研究項目を、「伝統歴史地理学の視点」と「近代歴史地理学の視点」の双方で、相互補完的に研究を進めてゆく。「伝統歴史地理学の視点」の到達目標は地誌(『水経表』)と対応する絵図の完成であり、「近代歴史地理学の視点」の到達目標は経路地点や路線の比定や景観復原である。そして両者を統合しての、水経認識の復原を最後の到達目標とする。それぞれにおよそ一年の研究期間を置き、都合三年間の課題とする。「伝統歴史地理学の視点」は、二次史料の確保のため、先行して進める。

4. 研究成果

結果として、本課題で目論んでいた研究内容のうち、およそ8割は、できたのではないかと思う。新型コロナウイルスによるパンデミック下において、フィールド調査が必須である本課題において、出来る限りの手は尽くしたと思う。まず、水経のデータベース化についてであるが、初年次に、『東国文献備考』と『山水考』に記載された水経について、掲載された全河川の、全京地名について、Excelに入力し、さらに図化を行った(図1)。

さらに18世紀当時の『山経表』や『道里表』のフォーマットを利用して、仮想の『水経表』を、漢江水経について、作成を試みた(図2)。漢江水経は、首都ソウルを含む水経であるので、首都特有の詳細な河川体系についても、分析対象にできるためだ。この作業は、当時の実学者が

なしえなかった水経の族譜化を行い、2世紀半遅れて「山川道里」という、朝鮮王朝時代の国土地理体系の族譜化を完成させたという点で、画期的であった。また、この作業を通じて、18世紀型の実学中心の朝鮮歴史地理学と、21世紀型の、現代系統地理学の一環としての、韓国歴史地理学を行き来することが、当時の歴史地理学者の思考方式の内面を斟酌するうえで、効果的であることも、確認された。実際、『水経表』の作成は、『山経表』を逐一参照しながら行ったのだが、副次的効果として、当時の『山経表』が、『東国文献備考』の散文式の記述を、どのような原理で族譜式に変換したのかが、深く理解できた。上記の内容は、2019年度の韓国文化歴史地理学会大会で発表した。

さらに、水経単体の特性についても、2020年度に研究を深化させた。この時既に韓国への渡航が事実上不可能になっていたため、上記のデータベースをもとに、地形図と衛星写真を使用したりリモートセンシングを加味して、分析を進めた。その結果、水経の選択には、一定の「原則」が存在することが発見された。またその原則は、山経や道路の路線選定の原則とほぼ同一であることも確認された。すなわち、山経も河川も、全ての路線を収録することはできないために、約400ある地方都市の立地が選定の基準になるという点である。この結果、地方都市を核として、山経と水経が陰と陽の関係を結ぶことになる。この形局は、風水地理説の根幹と同根であり、山経や水経そのものも、風水に依拠した陰陽の関係を、都市規模でも国土規模でも、体現していることになる。以上の内容は、2020年度の世界韓国学大会での発表を経て、同年度の『立命館文学』誌上に掲載した。一方の欠点として、水経は海に直接注ぐ小河川は捨象しているため、山経や道路とは異なり、全ての地方都市を網羅しているわけではないという点がある。

2021年からは、水経を含めた、当時の国土地理思想全体について、海外の事例も含め、検討を始めた。やはりパンデミック下であったため、机上検討が中心になった。その結果、「山川道里」は東洋的な世界観を発源としつつ、実用優先の中国の山川道里とは異なり、風水を中心とした理念を優先していることと、その理念が、当時の東アジア情勢を反映した、至極地政学的な動機に後押しされていたことを、導き出した。この件は、2022年度に国際交通史学会（T2M）のイタリア大会で発表を行った。

今後、その成果を上記学会の学会誌（Journal of Transport History）に投稿するとともに、これまで山川道里について発表してきた論考を整理して、日本又は韓国で単行本を発行することを目標としている。

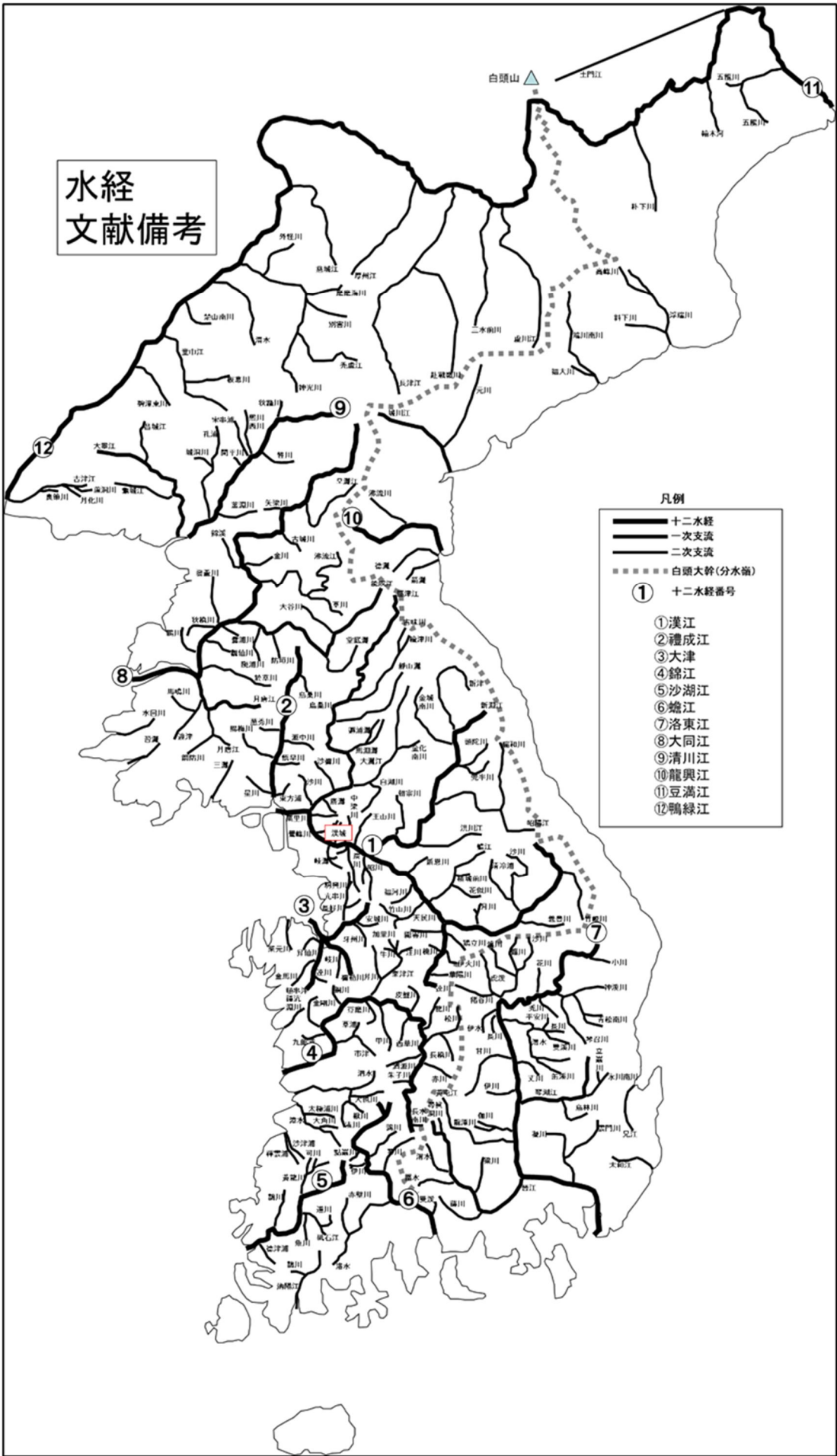


図1 水経図

	沙川		沙川		清冷浦										漢江	漢江	
	禿峙		牟田峙		德高山										于筒水		五台山
			燕方山 合二		素草水								横溪		金剛淵		
			龍淵		川九龍山					墨川	竹峴川		大関嶺		珍富駅 西		
			平昌郡		酒泉 古栗				碧灘	大枝山 神楸	長遠				合二左		細川
			南津		栗前津	平安川	淨巖	至近							合二左		桐江
			麻池津		新興川	斗満山	花折峙								合二右 西		旌善
			裾瑟岬		刀峴										合二左		三仙巖
					月隠山												錦障江
					陰谷川										西		寧越府
															合二右	金鳳淵	

図2 水経表(部分)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 轟博志	4. 巻 28
2. 論文標題 新羅における幹線駅路のミクロスケールの復原試論	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 北東アジア地域研究	6. 最初と最後の頁 49-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 轟博志	4. 巻 56
2. 論文標題 全国地理誌に現れた済州島の位置づけ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 済州島研究	6. 最初と最後の頁 77-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.47520/jjs.2021.56.77	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 轟博志	4. 巻 13-1
2. 論文標題 申景濬『山水考』と『山経表』の内容比較	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 韓国古地図研究	6. 最初と最後の頁 95-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.22787/oldmap.2021.13.1.004	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 轟博志	4. 巻 672
2. 論文標題 朝鮮王朝時代の国土地理思想における「水経」の位置づけ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 立命館文学	6. 最初と最後の頁 163-180
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 轟博志	4. 巻 11
2. 論文標題 統一新羅における幹線駅路と行政区画の関係に関する試論	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 コリア研究	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 轟博志	4. 巻 12-1
2. 論文標題 地籍原図を活用した新羅武珍州(武州)の景観復原	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 韓国古地図研究	6. 最初と最後の頁 5-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 轟博志	4. 巻 29
2. 論文標題 朝鮮時代における国土観と通信使の対日心象地理	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 朝鮮通信使研究	6. 最初と最後の頁 101-124
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計15件(うち招待講演 1件/うち国際学会 2件)

1. 発表者名 轟博志
2. 発表標題 朝鮮半島院宇立地の通時性
3. 学会等名 年例学術大会 大韓地理学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 轟博志
2. 発表標題 Roads as part of early modern Korean imaginative geography
3. 学会等名 T2 M 20th Annual Conference Padua (Italy), 21-24 September 2022
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 轟博志
2. 発表標題 明清代における満州地域の陸上交通路
3. 学会等名 北東アジアの交通史と移動経験 満州学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 轟博志
2. 発表標題 旧満州地形図に現れた清代駅路の線形特性
3. 学会等名 文化歴史地理学会年例学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 轟博志
2. 発表標題 済州 - 日本交流2千年の歴史と未来
3. 学会等名 済州学会年例学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 轟博志
2. 発表標題 文禄・慶長の役における、加藤清正の侵攻経路
3. 学会等名 RCAPSリサーチトーク「日韓における山岳空間と交通路認識」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 轟博志
2. 発表標題 第三空間としての朝鮮半島の山水概念
3. 学会等名 RCAPS Current Research Seminar
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 轟博志
2. 発表標題 朝鮮国土の空間的アイデンティティ
3. 学会等名 文化歴史地理学会年例学術大会（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 轟博志
2. 発表標題 新羅時代における駅路の微視的線形
3. 学会等名 文化歴史地理学会年例学術大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 轟博志
2. 発表標題 申景濬の水系認識を通じて見た朝鮮の国土地理思想
3. 学会等名 18th ASIA PACIFIC CONFERENCE
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 轟博志
2. 発表標題 統一新羅に おける幹線駅路と行政区画の関係
3. 学会等名 日本地理学会秋季学術大会2020
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 轟博志
2. 発表標題 朝鮮時代における水経関連地名の比定について
3. 学会等名 The 10th World Congress of Korean Studies
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 轟博志
2. 発表標題 朝鮮通信使の心象地理～水、山、町
3. 学会等名 ユネスコ世界の記憶遺産登録2周年記念シンポジウム 「朝鮮通信使と福岡、時代を超えて！」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 轟博志
2. 発表標題 朝鮮王朝時代後期の「水経」体系復原について
3. 学会等名 日本地理学会 秋季学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 轟博志
2. 発表標題 朝鮮時代における水経体系の特性
3. 学会等名 韓国文化歴史地理学会大会（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関